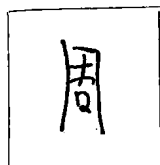


五郎全集

第一卷

講談社



山本周五郎全集

第1巻 柳橋物語

昭和38年12月20日 第1刷発行

定 価 480円

著 者 山本周五郎

発行者 野間省一

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽町3ノ19

電話 東京(942)1111(大代表)

振替 東京3930

© Shugoro Yamamoto 1963

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

山本周五郎全集 第一卷 目次

柳橋物語

三

日本婦道記

一〇一

花筵

三三

むかしも今も

三〇一

解説 戸石泰一

三三

口絵写真

執筆中の著者

(昭和二十三年)

撮影 水野イサオ
デザイン 伊藤憲治

柳
橋
物
語

前篇

一

青みを帯びた皮の、まだ玉虫色に光っている、活きのいいみごとな秋鱈あきわらだった。皮をひき三枚におろして、塩で緊めて、そぎ身に作って、鉢に盛った上から針ししゅうょうがを散らして、酢をかけた。……見るまに肉がちりちりと縮んでいくようだ、心はずむむように楽しい、つまには、青じそを刻もうか、それとも蓼たで酢を作ろうか、歌うような氣持でそんなことを考えていると、店のほうから人のななし声が聞えて来た。

「いったいいつまでにやればいいんだ」

「無理だろうが明日のひるまでに頼みたいんだ」

「そいつはむつかしいや、明日までというのがまだ此処にこれだけあるんだから、まずできない相談だよ」

「そうだろうけれど、どうしても爺さんの手で研といで貰いたいんだ、そいつを持って旅に出るんだから」

「旅へ出るって」源六のびっくりしたような声が聞えた、

「……おまえが旅へ出るのかい」

だからな、無理だろうけれどそれでやって来たんだよ」
庄吉のこえだった。おせんは胸がどきっとした、庄さんが旅に出る、出仕事だろうかそれとも、そう思つてわれにもなく耳を澄ました。

「そうかい」と源六が返辭をするまでにはかなりの間があった、「……じゃいいよ、やっておくから置いていきな」
「済まない、恩に衣きるよ爺さん」

そしてその声の主は店を出た。おせんがその足音を耳で追うと、それが忍びやかに、けれどすばやくこの勝手口へ近づいて来た。おせんはその腰高障子をそっと明けた。

庄吉が追われてでもいるような身ぶりですっと寄つて来た。血のけのひいた顔に、両の眼が怖いような光を帯びておせんを見た、彼は唇を舐めながら囁くように云った。

「これから柳河岸へいつて待っているよ、大事なななしがあるんだ、おせんちゃん、来て呉れるかい」

「ええ」おせんは夢中で頷いた「……ええいくわ」
「大川端のほうだからね、きつとだよ」

そう念を押すとすぐ庄吉は去つていった。おせんは誰かに見られはしなかつたかと、……どうしてそんなことが気になるかは意識せずに、……横丁の左右を見まわした。向う側にはかもし屋に女客がいるきりで、貸本屋も糸屋も乾物屋もひっそりとしているし、主婦がおしゃべりでいつも人の絶えない山崎屋という飛脚屋の店も、珍らしくがらんとして猫が寝ているばかりだった。障子を閉めたおせん

は、箆にあげてある青じそを取って、俵板またなの上に一枚ずつ重ねて、庖丁をとりあげたまま暫らくそこに立ち竦んでいた。なんと云って家を出よう。そんなことは初めてなので、怖いようでもあるし、お祖父さんに嘘を云うことが辛かった。けれども頭のなかでは庄吉の蒼ざめた顔や、思い詰めたようなうわずった眼や、旅に出るといふ言葉などが、くるくると渦を巻くように明滅し、彼女の心をはげしくせきたてた。……そうだ、おせんは俵板の上の青じそを見てふと気づいた。柳原堤へいつも出るはしり物屋がある、このあいだ通りかかったら独活どくわくがあった。あれを買って来てつまにしよう、駆けてゆけば庄吉の話聞くひまくらいはあるだろう、おせんは前垂で手を拭きながら台所からあがった。

「お祖父さん、ちょっといって鱈たかのつまにする物を買って来ますよ」

「鱈のつまだって」源六は砥石から眼をあげずに云った、
「……つまなんか有合せで結構だぜ、あんまり気取られると膳が高くなっていかねえ」

「それほどの物じゃありませんよ、すぐ帰って来ますからね」

そしてなおなにか呼びかけられるのを恐れるように、店の脇から出て小走りに通りのほうへ急いでいった。……中通りをまっすぐにつき当ると第六天の社である。柳原へはそこを右へ曲るのだが、おせんは左へ折れ、平右衛門町を

ぬけて大川端へ出た。

隅田川は夕潮でいっぱいだった。石垣の八分めまでたぶたぶとあふれるような水からはかなりつよく潮の香が匂ってきた。初秋の昏れくらがたの残照をうけて、川波は冷たくにぶ色にひかり、ひとところだけ明るく雲をうつつしていた。竹屋の渡しあたりを川上へいそぐ小舟が見えるほかは、広い川面に珍らしく荷足にりも動かず、鷗の飛ぶようすもなかった。……河岸ぞいに急いでゆくと、足音に驚いて小さな蟹が幾つも、すばやく石垣の間へ逃げこむのがみえる。ついでとそれを踏みつけそうで、おせんははらはらしながら歩いていった。神田川のおち口に近い柳の樹蔭の、もううす暗くなったところに庄吉は立っていた。柳の樹に肩をもたせて、腕組みをして、どこやら力のぬけたような姿勢で、ぼんやり川波を見まもっていた。

「有難うよく来て呉れた」

彼はおせんを見ると縫りつくような眼をした。

「あたし柳原まで買物をしてゆくつもりで出て来たの、遅くなつては困るし、もし人に見られるときまりが悪いから……」

「話はすぐ済むよ」庄吉はおせんよりおどおどしていた、ふだんから色の白い顔が、血のけもないほど蒼くなり、大きく瞳らひとみらしている眼は、不安そうに絶えずあたりを見まわすのだった。「……今朝とうとう幸太と喧嘩をしてしまった、おれはがまんして来た、きょうまでずいぶんできない

がまんをして来たんだ、けれどもどうせいつかはこうなる、おれか幸太か、どっちか一人はこの土地を出なくちゃあならないんだ、そして幸太が頭梁の養子ときましたからには、出ていくのはおれとわかりきっていたんだ」

「でもどうして、どうして喧嘩になんぞなったの、幸さんとどんなことがあったの」

「今朝のことなんかたいしたことじゃあない、ただ喧嘩のきっかけがついたというだけで、はっきり云ってしまえば……」庄吉はそう云いかけてふと口を噤んだ、それから臆病そうに、けれどどくいるような烈しい眼つきで、おせんの顔をじっと見つめた、「……いやそれを云うまえに訊いて置きたいことがあるんだ、おせんちゃん、おれは明日、上方へ旅に出るよ」

「……………」

おせんはこくつと生唾をのんだ。

「江戸にいれば頭梁の家で幸太の下風につくか、とびだしたところで、一生叩き大工で終るよりほかはない、それより上方へ行って、みっちり稼いで、頭梁の株を買うだけの金をつかんで帰って来る、知らない土地ならばみえも外聞もなく稼げるし、あつち諸式がずっと安いそうだから、早ければ三年、おそくとも五年ぐらいで帰れるだろう、おせんちゃん、おまえそれまで待っていて呉れるか」

「待っているって」おせんは声ふるえた、「……あたし、庄さん」

「そうなんだ、きょうまで口ではなんにも云わなかったけれど、おれがおせんちゃんをどう思っていたかということはわかっていて呉れた筈だ、おそくとも五年、帰って来れば頭梁の株を買って、きつとおまえを仕合せにしてみせる、おせんちゃん、それまでお嫁にゆかないで待っていて呉れるか」

「待っているわ」おせんはからだじゅうが火のように熱くなった。そして殆んど自分ではなにを云うのかわからずにかう答えた、「……ええ待っているわ、庄さん」

「ああ」庄吉はいっそう蒼くなった、「……有難うおせんちゃん、おかげで江戸を立つにもほりあいがある、そしてその返辞を聞いたから云うが、実は幸太もおせんちゃんを欲しがっているんだ、喧嘩のことは詰りそれなんだ、だからおれがいなくなれば、きつと幸太はおまえに云い寄るだろう、そいつは今から眼に見えている、だがおれはこれっぽっちも心配なんかしやあしない、おせんちゃんはおれを待っていて呉れるんだ、どんなことがあっても、そう思っているいいな、おせんちゃん」

そのときおせんは譬えようもなく複雑な多くの感情を経験した。あとになって考えると、わずかに四半刻ばかりのその時間は、彼女の一生の半分にも当るものだった。……おせんは覚えている、そのときあたりは昏れかけていた。つい向うに見える兩國の広小路も、川を隔てた本所の河岸も、このあいだまでは水茶屋に灯がはいり、涼み客のざわ

めきで賑わっていたのに、いまは掛け行燈の光もなく並んだ茶店はもう女たちも帰ったのだろう、ひっそりと暗い葎簾が巻いてある、もう肌さむいくらいな川風に、柳の枯葉はあわれなほど脆く舞い散り、往來の人の忙しげな足どりも、物売のかなしげな呼びごえも、すべてが秋の夕暮のはかなさを思わせるものばかりだった。

庄吉に別れるとそのまま家へ帰った。もう柳原へいって来るには遅いと思ったから。帰るみちみち、おせんの胸はあふれるような説明しようのない感動でいっぱいだった。

それは生れて初めての、あまい、燃えるような胸ぐるしいほどの感動だった。庄吉と逢ったわずかな時間、庄吉から聞かされた短かいその言葉、その二つが彼女のなかに眠っていた感情と感覚とをいっぺんによび醒ましたのである。

街の家並もたそがれのあわただしい景色も、常と少しも違つてはいないのだが、今のおせんにはびっくりするほど新しくもの珍らしいように思え、こんなにしっかりとりたい町だったのかと見なおすような気持だった、源六はもう灯をいれて、砥石に向っていた。

「おそくなって済みません」おせんはそう声をかけながら、店へはいろうとしてふと気がつき表に掛けてある看板を外した、雨かぜに曝されてすっかり古びているが、真中に御研ぎ物、柏屋源六と書き、その脇へ小さな字で、但し御槍なぎなた御腰の物はごめんを蒙ると書いてある、おせんは看板の表の埃を払いながらいった、「……このあいだ

独活どくわくがあったのでいって見たのだけれど、きょうはあいにくどこにもないのよ、おじいさん、かんにんして下さいね」

「だから有合せでいいって云ったんだ、つまなんぞどうでも秋鱈の酢があればおれは殿様だぜ」

「それではすぐお膳にしますからね」そしておせんはもう暗くなった台所へはいっていった。

二

庄吉はその明くる日、たのんだ研ぎ物を受取りかたがた別れに来た。源六には「三年ばかり上方で稼いで来る」と云っただけで精しい話はしなかった、おせんには達者であるように云い、おもいをこめた眼でじっとみつめながら、まるで泣いているような微笑をうかべた。そしてその日午後、品川のほうにある親類の家から旅に立つ筈で、茅町の土地を去っていった。

おせんは四五日ばんやりと、気ぬけのしたような気持で日を送った。なにかしていてもふと庄吉のことを考えている。蒼ざめた顔や、思いつめたきみの悪いような眼や、おずおずした、けれど真実のこもった囁き声などを繰り返して繰り返して考え耽っているような日が。……その次には旅のあなたが気になりだした。もうどのくらい行つたらう、箱根はおじに越したるうか、馴れない土地は水にあたり易いという、病みつくようなことはないかしらん、そして、よ

く人の話に聞く道中の恐ろしい出来事や、思いがけない災難があれこれと想像されて、ぞっと寒くなるようなことも度たびだった。こういうことが半月ほど続いたあと、少しづつ気持がおちついてくるとおせんは庄吉と幸太とのかわり、かれらと自分との繋がりを感じ返した。

茅町二丁目の中通りに杉田屋巳之吉という頭梁が住んでいる、家にいる職人だけでも十人ほどあり、多く武家屋敷へ出入りをする名の売れた大工だった。おせんの家は元その隣りで髪結い床をやっていた。父の茂七は彼女が十二のとき死んだが、口の重い、癩の強い性質で、あいそというものがまったく無いため、よく知っている者のほかは余り客も来なかった。また母は病身で月のうち十日は寝たり起きたりのありさまだったから、家の中はいつも、鬱陶しく沈んだ空気に包まれ、いつもどこかに溜息が聞えるという風だった。……おせんはごく幼い頃から、一日じゅう杉田屋の家で遊び暮らすことが多かった。巳之吉も妻のお蝶も子供が好きなのに、一粒だねの女兒が生れて半年めに死んでしまい、そのあとずっと子が無かったので、おせんがまだ乳ばなれもしないうちから、よく来ては「なんだか膝さびしくって」などと云っては抱いてゆきゆきした。おせんはほうでもお蝶によく馴ついて、自分の家は狭く、陰気な、子供ごころにもなにやら息詰るような感じだったが、杉田屋は座敷も広く人も大勢いて賑やかだし、そこにはいつも玩具や菓子が待っていた。着物や帯もずいぶん買って

貫った、春秋には白粉を付け髪を結び、美しく着飾って、そのころ杉田屋にながくいた定五郎という老人の背に負われて、巳之吉夫妻といっしょに花を見にゆき、秋草を見にいった。王子権現の滝も、谷中の蟹沢も、本所の牡丹屋敷も、みなそうして知ったのである。

——おせんちゃん、小母さんの子におなりでないか、そのじぶんお蝶はよく頬ずりしながらそう云った。するとおせんは生まじめな顔になり、いかにも困ったというように首をかしげながら、あたしおつかさんの子でなければおばさんの子になるんだけれど、きまってそういう返辞をしたそう、そんな幼さに似あわぬ、情の籠ったようすだったと、後になってからよく聞かされた。

おせんは九つの年に母が亡くなった。そして間もなくお祖父さんが来ていっしょに住むようになった、源六は父にとつて実の親だったが、気性が合わないため別居し、神田のほうで研屋をしながらずっと独りで暮らしていた。それが茂七が妻に死なれ、おせんを抱えて惘然としているのをみて、自分からすんでいっしょになったのである。それまでも菓子や花簪などを持っては折おり訪ねて来たので、おせんはよく知ってもいたし母の亡くなったあとの淋しいときだったから、すぐ源六に馴ついて、夜なども抱かかって寝るようになった。……幸太と庄吉とはその後から知り合ったのだ、幸太は巳之吉の遠い親類すじに当り、十三の春から、杉田屋へ徒弟にはいった。口のきき方もすること

も乱暴な、ひどくはしっこい少年で、来る早早から職人たちと達者に口喧嘩などするという風だった。庄吉は幸太より半年ほどあとから来た、不仕合せな身の上で、両親もきょうだいもなく、品川で漁師をしている遠縁の者が親元になっていた。彼は幸太とは反対にごくおとなしい性分で、おない年とはみえないほど背丈も低く、ひよわそうな女の子のような感じだった。母が亡くなってからはおせんはあまり杉田屋へいかなくなかった。お祖父さんが止めるし、父も好まないようすだったから、ずっとあとになつてわかったことだが、杉田屋から養女に貰いたいという話があり、父との間が気まづくなつたのだという、……けれども杉田屋のほうでは別に変つたようすもなく、お蝶が自分でなにか持つて来て呉れたり、幸太や庄吉を使によこして食事に呼んだり、芝居見物につれだしたりした。

茂七が死ぬとすぐ、源六はおもて通りの店をたたんで、中通りの今の住居へ移つた。もうおせんも十二になつていたし家も離れたので、巳之吉やお蝶とはしだいに疎くなつたが、職人たちは道具を研いで貰うためにしげしげやつて来た。「いちにんまえの大工が自分の道具をひとに研がせて申しわけがあるのかい」源六はいつもそう叱りはしたが、そのあとでは彼らによく職人氣質かたぎというものを話して聞かせた、砥石に向つて仕事をしながら訥訥とした調子で古い職人たちの逸話を語るとき、老人はいかにも楽しそうだし聴く者にとつてもおもしろかった。世間は表裏さだめ

難く人生の転変は暫らくもつたりやまない。生活はいつも酷薄できびしく些さかの仮藉かてきもない、そのあいだにあっていかに彼らが仕事に対する情熱の純粹さを保つたか、いかに自分の良心の誤まりなさを信じたか、老人のしずかに語るそういう数かずの例は、聴く者にとつてただおもしろいだけではなく、そういう人たちのように生きようというこゝと、どんな苦しいことにも負けずに本當の仕事をしようという氣持をよび起こされるのだった。……幸太も庄吉もしばしば来た、幸太は相変らず口が悪くすることも手荒かつたが、仕事の腕はもういちにんまえだと云われていた。「へん、腕で来い」そう云つて兄弟子たちにも突つかかることが少くなかつた。芝居を見にゆくと花簪とか役者の紋を染めた手拭とか半衿などを買つて来て呉れるが、決しておとなしく渡すようなことはない、そつぽを向いて「ほら取りな」などと云いながら投げつけてよこすのだった、そのくせおとなしい庄吉よりもおせんには彼のほうが近い感じだ、なにか頼んだりするにはいつも幸太ときまつていたのである。

幸太が杉田屋の養子にきまつたのは、去年の冬のことだった。かなり派手な披露宴があり、源六やおせんも招かれた、十九という年になつても幸太は幸太らしく、巳之吉と親子の盃をするときには赤くなつて神妙にしていたが、酒宴になるともう窮屈に坐つているのが耐らないらしく、膝を崩して注意されたり、しきりに立つたり、また膳の物も

遠慮もなく突つて叱られたりした。それが十三四の頃のいたずらな彼そのまま、おせんは遠くから眺め乍ら幾たびもくすくすと笑った。……そのとき庄吉はひどく蒼い顔をして、元氣のないようすで客の執持をしていた。おせんは別に氣にもとめなかったが、暫らく経つてから、養子のはなしは幸太と庄吉の二人のうちということで始まり、結局は幸太にきまったのだと聞いてから、酒宴のときの庄吉の沈んだようすが思いだされてはげしく同情を咬られた。

——庄さんのほうがおとなしくつて人がらなのに、杉田屋さんではどうして庄さんをご養子にしなかつたんでしよう。おせんはそれが不服でもあるように云つたものだ。

——どっちでもたいした違いはないのさ、と源六は笑いもせずと答えた。杉田屋の養子になつたからといつてゆくすえ仕合せとはきまらないし、なり損ねたからといつてゆくだつがあがらないわけではなからう。運、不運なんというものは死んでみなければ知れないものさ。

元もと温順な庄吉は、それまでと少しも変らず黙つてよく稼いでいた。もう腕も幸太に負けなかつたし、仕事に依つては彼のほうが上をゆくものもあつた。然しおせんにはそれが幸太と張り合つているように、腕をあげることで意地を立てようとしているようにみえ、いっそう庄吉が孤独な者に思われて哀れだつた。……だがいづれにしても、幸太と比べて庄吉のほうが好きだと考えたことなどはなかつた。

た、幸太のときばきした無遠慮さ、自分を信じきつた強い性格はにくいと思つても不愉快ではない。庄吉の控えめなおとなしき、いつもじつとなにかをがまんしているというようなところはあわれでもあり心を惹かれる、二人とも幼な馴染で、どちらにも違つた意味の近しさをもつていたのだ。

「けれどももうそれもおしまいなんだわ」おせんはあまいようなら悲しい氣持でそう呟く。

「……庄さんはあたしの待つてゐることを信じて上方へいつたのでも、違つた人情と雨かぜのなかで、あたしと二人のために苦勞して稼いで来るのでも、あたしだつて庄さんだけを頼りに待つていなければならぬわ、どんなことがあつても」

おせんは自分の心も感情も、庄吉のことでいっぱいだと思ふ。するとそれがさらに彼のうえを思うさそいとなり、時には胸の切なくなるようなことさえあつた。——もう大阪へ着いた頃であらう。宿はきまつたかしらん。うまく稼ぎ場の口がみつかるだらうか、もう手紙くらい来てもいい筈だけれど、そんなことを思いつつ秋を送り、やがて季節は冬にはいつた。

三

霜月はじめの或る日、向うの飛脚屋の店に在る権二郎という若者が、買い物に出たおせんのあとを追つて来て手紙

を渡した。「杉田屋にいた庄さんから頼まれてね」と、彼はにやにやしなから云った。

「まあ」おせんはかっと胸が熱くなった。

「……どこで、この手紙どこで頼まれたの」

「大阪でひょつくりぶつつかったんだ、そうしたらこれを内証で、おせんに渡して呉れと云われてね、元気でやっているからってさ」

「そう有難う、済みません」

権二郎はまだなにか云いたそうだったがおせんは逃げるように彼から離れていった。……山崎屋はさして大きくないがともかく三度飛脚で、大阪の取組先があり若者も五人ばかり使っていた、権二郎はその一人だが、用達には誰よりも早く、十日限、六日限などという期限つきの飛脚は彼の役ときまっているくらいなのに、酒癖が悪くて時どき失敗し、店を逐われてはまた詫を入れて戻るといふ風だった。「どうして庄さんはあんな人に頼んだのかしら」おせんは買い物をして家へ帰るまでそれが気になった、「……また酒にでも酔って、近所の人にも話されたらどうしよう、そんなことのないようにしては呉れたらうけれど、あの人の酒癖を知っていたらよして呉ればよかった」たぶん遠いところで同じ土地の者に会ったなつかしさと、手紙を内証で渡したさについ頼んだものに違いない。そう考えたもの、おせんにはなにかよくないことが起りそうに思え、どうしても不安な気持をうち消すことができなかつ

た。

その夜お祖父さんが寝てから、おせんは行燈の火を暗くして手紙を読んだ。それはごく短かいものだった。道中なにごともなく大阪へ着いたこと、道修町（みちしゆまち）というところの建具屋へひとまず草鞋をぬぎ、いまその世話で或る普請場へかよっていること、江戸とは違って人情は冷たいが、詰らぬ義理やみえはりがなく、どんなに儉約な暮しでもできることなど簡単に記してあり、終りに「手紙の遣り取りなどすると心がぐらつくから当分は便りをしない、そちらからも呉れるな」ということが書いてあった。おせんは飽きるまで読み返した。もちろん、仮名ばかりだし、云いたいことの半分も表わせない、もどかしさの感じられる筆つきだったが、読むうちに異郷の空の寒さむとした色がみえ、暗い街筋や橋や、乾いた風の吹きわたる埃立った道などが眼にうかんだ、そしてそういう風景のなかで、知り人もなく友もない彼が、たったひとり道具箱を肩にして道をゆき、どこかの暗い部屋の中でひっそりと冷たい食事をする、そういう姿が哀しい歌かなにかのように想像されるのであった。

自分では意識しなかったが、その手紙のおせんに与えた印象は決定的だった、突込んで云えばおせんは顔つきまで変った、庄吉を思うそれまでの感情は、十七になった少女のものでしかなかった、現実と夢とのけじめさえ定かならぬ、ほのかな憧憬に似てあまやかなものだった。然しその

手紙を読み遠い見知らぬ土地と、そこでひたむきに稼いでいる彼の姿を想いやつたとき、おせんの感情は情熱のかたちをとりだした、十七歳という年齢はもはや成長して達した頂点ではなく、そこからおんなに繋がる始点というべきものとなったのである。

或る日の午後、杉田屋から源六を呼びに使が来た、そんなことは絶てなかつたし、用事もはつきりしないので、源六はちょっといき渋ったが、追っかけ催促があつたのでやむなくでかけていった。……それは夕餉のあとだったが、一刻ほどすると赤い顔をして帰った。

「あらおよばれだつたんですか」

「なにそれでもないんだが」上へあがるとき源六はふらふらした、「……これはひどく酔つた」

「たいそうあがつたのね、臭いわ」

「水を貰おうかな」

「床がとつてありますから横におなりなさいな」

おせんはお祖父さんを援けて寝かしながら、老人が自分のほうを見ようとしないうちに気づいた。なんとなくおせんの眼を避けているようだった。どうしたのかしら、水を汲んでゆきながらおせんは微かに不安を感じた。

「済まないもう一杯くんな」源六は湯呑の水をたてつづけに三杯もおおつた、「……何百ぺん云つても酔醒めの水はうまいもんだ、若いじぶんまだ酒の味を覚えはじめた頃だったが、酔醒めの水のうまさを味わうために、まだうまく

もない酒を呑んだことさえあつた」

「ねえお祖父さん」と、おせんは源六の眼をみつめながら云つた、「……杉田屋さんではなにか御用でもあつたんですか」

「そうなんだ」源六はなにか思案するように、ちょっと間を置いて頷いた、それから仰向に寝たままで、しずかにこちらへ顔を向けた、「……話というのはな、おせん、正直に云つてしまふが、おまえを嫁に呉れということなんだ」まあとおせんは打たれでもしたように片手で頬を押えた。源六はそれを見て眉をしかめ、良心の苛責を受ける者のように眼を伏せた。そして重たげに身を起し、自分で湯呑に水を注いで喉を鳴らしながら飲んだ。

「それで、お祖父さんは、どう返辭をなすつたの」

「おまえには済まないが断つた」

「……………」

「本当に済まないと思う、杉田屋はあれだけの株だし、幸太はどこに一つ難のない男だ、そればかりじゃあない、杉田屋の御夫婦とおまえとは、乳呑み児のじぶんから馴染だ、おまえはきつと仕合せになるだろう、だがおれにはできなかつた、どうにも頼むと云えなかつた」源六はそこでぐったり寝床の上に身を伏せた、「……人間には意地というものがある。貧乏人ほどそいつが強いものだ、なぜかといえ、この世間で貧乏人を支えて呉れるのはそいつだけなんだから、おまえはなにも知らないだろうが、おまえの

おっ母さんがまだ生きていた頃のことだ、杉田屋のおかみさんが来て、枕もとへ坐って、おまえを養女に貰いたいと云いだした、そのときお蝶さんはこういうことを云ったそうだ、茂七さんはあんな性質だから、これからさき当てもたいてい知れたものだ、そのうえおまえさんはその病身で、いつどんなことがあるかわからない、杉田屋へ貰えば着たいものを着せ、食べたい物を食べ、観たいものを観せて気楽に育てられる、わが子を仕合せにしたいというのが親の情なら、きつとよろこんでおせんちゃんを養女に呉れる筈だ」

源六はそこまで云ってふと言葉を切った。灰色の薄くなくなった髪の毛つれたのが、行燈の光をうけてきらきらと顫えている、苦しかった六十七年の風霜を刻みつけたような皺の多い日に焦けた渋色の顔は、そのときの回想の辛さに歪んだ。

「杉田屋のおかみさんに悪気はなかったろう、けれども聞くほうにはずいぶん辛い言葉だった、というの、……おまえのおっ母さんという人は、初め杉田屋の頭梁のところへ嫁にゆく筈だった、けれどおっ母さんは茂七が好きだったので、いったん親たちのきめた縁談を断わって茂七といっしょになった」源六はそこでほんとと息をついた、「……その頃はうちでも下職の二人くらいは使っていた、さして余りもしないが不自由な思いをするほどでもなく、好きでいっしょになった夫婦にはまず頃合の暮しだった、やがて

頭梁のそこへもお蝶さんが来て、表面は茂七と巳之さんのつきあいも元どおりになったが、根からさっぱりしたわけではなかったようだ、そして間もなく茂七に悪い運が向いてきた、下職の一人が剃刀を使いそくなって、酔っていたんだな、客の顔に傷をつけてしまった、然もそれがふりの客だったし、傷はかなり大きかった。茂七はなんども町役と呼ばれたり、法外な治療代を取られたりした、くさっていったところへ、こんどは別の下職が箆箭の中の物や少しばかり貯めた金を掠って逃げた……おまえが生れたのはそのじぶんだったが、もともとあまり達者でもなかったおまえのおっ母さんは、お産をしたあとずっと弱くなって月のうち半分寝たり起きたりしているようになった、客に傷をさせてから店もさびれだし、だんだん暮しが詰っていった。杉田屋のおかみさんがおまえを抱きに来はじめたのはその頃のことだった、お蝶さんは少しまえに、生れて半年足らずの女の児に死なれていた、けれどもおまえを抱いてゆき、着物や帯を買ったり、玩具や菓子を買ったりするのには、ただお蝶さんが膝さみしいというだけのことではなかった、こっちの落ち目になったのを憐れむ巳之さんの気持がはたらいていたんだ、……おまえのお父さんやおっ母さんにとつて、それがどんなに辛いことだったかわかるだろう、おっ母さんは巳之さんを断わって茂七といっしょになった、そういう因縁のある相手から、落ち目になって情をかけられるということは、嗤われるよりも辛い堪らないも